

救われた言い方

その日は、とても長い夜でした。

深夜2時すぎ、2歳の長男が突然、ケーンケーンと犬の遠ぼえのようなせきをしたかと思うと、ピューと口から吐しゃ物を出し、顔色は真っ青に。呼び掛けに反応なく、病院へ駆け込みました。

そして、診察。先生に、「急性喉頭炎こうとうえんです。呼吸困難の恐れもあるので帰せません。入院です」と告げられました。もう目の前が真っ暗です。実はそこからどう小児病棟まで移動したのか、今も思い出せません。当時、私は授乳を置いていて母子同室。しかも転落防止の1メートル近い柵付きです。最初の2〜3日は、私も夢中で子どもの世話をしましたが、症状が安定してくると、

夜も寝れるほどに穏やかに時が過ぎていきました。

けれども人間って不思議なもので、家族からも世間からも隔離されると飽きるのです。しかも、突然の入院でテレビや本の娯楽もありません。子どもも私も病室から出たくて、ウズウズしていました。が、感染の恐れがあり絵本のあるプレイルームすら入室は禁止されていました。

苦しかったです。母親の私は元気なのに、外へ行けない不満やイライラが募り、爆発寸前でした。ある日、もう衝動的に子どもを抱っこし、プレイルームへ行き、ひたすら遊びました。

スッキリしました。1時間くらい経ったのでしょうか。気付くと担当

〈埼玉県〉 渡邊 広子 39歳

の看護師さんがそばにいたのです。「○○くん、もうちよつとの辛抱だよ。あと少しお薬を続ければ、絶対治るから。だから、今日みたいに勝手に出ちゃダメ」

ハッと思いました。看護師さんは、私の気持ちを知ってて、この時間を過ごさせてくれていたんだと。でももつと心に響いたのは、さっきの言葉が子どもにだけ向けて言ったことでした。言葉がまだ分からない赤ちゃんに向けてです。

私への思いやりで、私を「叱る」のではなく、こんな方法で諭してくれたのだと……。その後、ベッドの上で、子どもを抱きしめ泣きました。何やってんだらう……。という反省と看護師さんの優しさに。